

祭りその2 祭り騒ぎをした合唱団

野口幹夫

先に子供時代の神社の祭りの思い出「枕太鼓」を書きましたが、それを「祭りその1」としたのは、祭りというのを神社仏閣の祭事にかぎらずもっと広く考えていて、「その2」を予定していたからです。

ある人間集団が、ある高みにむかって集い、見せるための舞台装置や、演出を1年以上準備して、あるひと時に爆発的に発露するようなことは、「祭り騒ぎ」といっていいのではないかと思います。今回はそんな思い出を書きます。

20年も前のことです。当時私は湘南シティ合唱団で合唱をしていました。歌ったのはモーツァルトのレクイエムから始めてドイツレクイエムやマタイ受難曲などなど代表的な宗教曲を演奏していました。そこに指揮者が挑戦したのが、全く宗教曲とは縁遠い異端の曲ともいえる「カルミナ・ブラーナ」という曲でした。作曲者はカルロ・オルフ つかわれた詩は13世紀 修道院に筆写のために働いていた若者たちが憂さ晴らしに書き散らした異端の詩集です。

作曲された時代は、第1次大戦後 敗戦で巨額の賠償金にあえぐドイツが、その国際協定を反故にすることを宣言したナチスが暴力的に政権を奪い取ったときです。ですから時代を反映するキーワードは「すべての抑圧からの解放」ともいうべきものです。むろん性の抑圧もあり運命からの、戒律からのなど様々の抑圧からの解放です。

第1曲の「運命の車は回る」が、物凄いリズムの音楽で印象深く迫ってくるので、これだけは記憶されておられる方も多いのではないかと思います。そして続いて「春」 若者たちの性の解放の喜びがあふれます。



湘南シティ合唱団 第7回 演奏会 レクイエム／カルミナ・ブラーナ 指揮／松井眞之
管弦楽／シンフォニエッタ・ジャパン 2000年4月9日 茅ヶ崎市民文化会館大ホール

当時私は湘南シティ合唱団の副団長を務めていました。この曲を演奏するのに思い切った演出をしました。普通は、男性は黒のスーツに黒の蝶ネクタイ 女性は白のブラウスに黒いスカートで決まりでした。まずこれを替えました。男はブルーのネックチーフに白シャツとしました。

この曲の後半に酒場の場面が出てきて、男性だけで酒の賛歌を歌います。それがラテン語の長い歌詞で、なかなか覚えられないのです。楽譜は持てません。それで1計を案じました、歌詞をプリントした白いジョッキを皆が持ち、酒場でジョッキをあほり飲むふりをし、歌詞を眺めて歌うのです。



神聖な合唱演奏会を お祭り騒ぎに変身させた思い出です。

このホームページの 2005 年にこのことを報告しましたのでご興味があればご覧ください

[カルミナ・ブラーナ その1 \(coocan.jp\)](http://coocan.jp)

[カルミナ・ブラーナ2 \(coocan.jp\)](http://coocan.jp)